

第 63 回大阪建築コンクール入賞発表

主催／公益社団法人大阪府建築士会 後援／大阪府

■大阪府知事賞部門	大阪府知事賞	龍谷大学 大宮キャンパス 東豊	岡田泰典・近藤 努・金井田雄介
■渡 辺 節 賞 部 門	渡 辺 節 賞	HAT house 一生きていく住まい―	阿曽芙美

趣旨
建築士はその職責を通じて地域社会の発展に寄与し、建築美を通じて建築文化の向上、ひいては地域文化の振興にも寄与していく必要があり、その責務は重大である。
大阪建築コンクールは、建築士と社会とのかかわりを通じて建築作品を評価し、その優れた実績をたたえ、建築作品の設計者である大阪府建築士会正会員または大阪府在住もしくは在勤の設計者を表彰する。同時に行う渡辺節賞については、新しい建築文化の原動力となる若い優れた設計者をたたえ、さらなる発展を望むものである。
募集範囲
2014 年 1 月 1 日から 2018 年 12 月 31 日の間に竣工し、完了検査済証の交付を受けた建築物
＊建築確認申請不要物件は完了検査済証不要
＊竣工年月日は工事完了時

審査経過並びに総評



審査委員長
松隈 洋

図らずも、引き続き審査委員長を務めることになった。それでも、初対面だった前回の審査員 4 人のうち 3 人が続投となり、構造設計者の榊田洋子氏と交代した橋本一郎氏も含め、前回の議論を踏まえる形で、審査は順調に進められた。また、事務局の万全のスケジュール管理と配慮もあって、忌憚のない活発な意見交換が行なわれ、十分な時間をかけた議論を通して、それぞれの賞が持つ意味と、それを選ぶことによって、審査委員会が

●大阪府知事賞部門
対象建築：建物の種類・規模は問わない
建築位置：近畿二府四県
応募資格：設計者が大阪府建築士会正会員または大阪府在住もしくは在勤の者
●渡辺節賞部門
対象建築：建物の種類・規模は問わない
建築位置：近畿二府四県
応募資格：設計者が大阪府建築士会正会員または大阪府在住もしくは在勤の者
完了検査済証発行日現在 39 歳以下
審査委員会
委員長 松隈 洋（京都工芸繊維大学教授）
委 員 橋本一郎（エス・キューブ・アソシエイツ）※50音順
鈴木修一（京都大学名誉教授）
松岡 聡（近畿大学教授）
松田浩三（前大阪府住宅まちづくり部公共建築室室長）

今の時代において建築に求められているテーマをどう提示できるのか、という評価基準について、密度の高い議論ができたと思う。その一方で、今回の応募作品の傾向として目についたのは、大規模なものや公共性のある建物が大幅に減り、住宅や小規模な建物が大半を占めた点である。このことが、昨今の厳しさを増す時代状況を反映し、コンクールの応募に値するような建築を手がける機会が減少したのか、と少し気がかりにもなった。
さて、今回は大阪府知事賞部門に 26 点、渡辺節賞に 7 点の応募があり、審査初日に、応募書類による一次審査を行なった。審査員各自による十分な時間をかけた応募書類の自由閲覧を経て、それぞれの判断により現地審査の対象に推薦する作品の投票を行い、その集計結果に基づいて絞込み作業を行なった。そこでは、1 票以上の得票を得たものについて、

審査
応募数 大阪府知事賞部門 26 点
渡辺節賞部門 7 点
審査委員会 3 回
●第 1 次審査
2 月 21 日 書類・図面、写真によって、大阪府知事賞部門 6 点、渡辺節賞部門 3 点を選考
●第 2 次審査
3 月 22 日、29 日 第 1 次審査通過作品について現地審査を 2 日間実施
●最終審査
3 月 29 日 第 2 次審査終了後に実施
大阪府知事賞部門：大阪府知事賞 1 点、渡辺節賞部門：渡辺節賞 1 点を選出
表彰式
日にち 令和元年 5 月 22 日（水）
本会定時総会式典席上
会 場 KKR ホテル大阪

推薦した委員の意見を再確認しながら、評価軸を見定める議論を繰り返した。そして、昨年と同じく、最後は審査員全員による合議により、現地審査対象を選定した。
以上のような一次審査の結果、府知事賞 6 点、渡辺節賞 3 点が現地審査の対象となり、2 日間にわたって全 9 作品を巡り歩いた。2 日目の現地審査の終了後、最終審査会を開いた。この二次審査では、現地審査した順に、それぞれの建物の評価について、再度一つ一つ意見交換をしながら確認を行なった。また、その際、書類審査によって判断した一次審査の時点と、現地で設計者の説明を受けた時点での印象の違いや、書類では読みきれなかった周辺環境とのつながりについても意見を求め、評価軸の再検証を進めた。そして、最後は、一次審査と同じく合議により、それぞれ 1 件の受賞作品を決定

した。
府知事賞に選ばれた「龍谷大学大宮キャンパス東豊」は、龍谷大学発祥の地である大宮学舎の一角に建設された。特筆されるのは、対面に建つ国の重要文化財に指定された本館など既存の建物と新しい形での調和を図ろうとしたファサード・デザインの方法である。それらの建物の歴史的要素に敬意を払いつつ、建築的な解釈を施した上で、さらに現代技術によって可能となった洗練さと透明感を加えることに成功している。その対比的なデザインは新たな道筋を切り拓いたものとして共感と賛同を得た。ただ、せっかくファサードで実現した透明性が内部空間までは貫徹できておらず、やや閉じた雰囲気となってしまったことが惜しまれる。それでも、今後の規範と成り得る優れた質を備えた建築である。
また、渡辺節賞に選ばれた「HAT house 一生きていく住まい―」は、設計者の建築と町に対する思いが十全に盛り込まれた表情豊かな空間づくりに共感が集まった。敷地は六甲山麓の閑静な住宅地にあり、設計者自身のアトリエと住まいを併設したつくりになっている。アトリエを住宅地に開き、住まいに奥行きのある迷路性を創出するために、屋根の架構を 45 度に傾けるなど、過剰なまでの楽しいアイデアが盛り込まれた内部空間になっ

審査風景



めに建てられた高気密・高断熱で、高齢者に配慮したエレベーターやつかまり手すりの設置、開放感とプライバシーを両立した隅切りの開口部など、さまざまなアイデアを盛り込んだ住まいと設計者自身のアトリエの併設だが、割り切りの良すぎる外壁の取扱い方など、もう少し踏み込んだ建築的提案がほしかった。
また、渡辺節賞候補の「デッキプロジェクト」は、宅地造成で生まれた斜面地への大胆な提案として注目されたが、上部の木造部分の構造が明晰ではないこと、1 階の擁壁と基礎部分に期待された以上の空間的な工夫が欠けていること、全体にやや仮設的な状態であり、将来性に不安が残るなどの疑問点が出された。そして、「太陽の塔」は、1970 年万博の遺構であるモニュメントの再生計画であり、内部空間を蘇らせる困難な仕事として高く評価される一方で、これほどの事業が果たして応募者個人に帰属できるものなのか、についての疑問が拭い切れなかった。
今回の審査で問われたのは、府知事賞における普遍性を併せ持つ優れた設計方法と周辺環境に対する積極的な提案の有無であり、渡辺節賞における自らの設計方法に対する真摯な姿勢と初心的なデザインの魅力だったのだと思う。続く応募と議論の広がりに期待したい。



■大阪府知事賞部門 大阪府知事賞 龍谷大学 大宮キャンパス 東麓

設計者 岡田泰典・近藤 努・金井田雄介（株式会社日建設計）



建築位置／京都市下京区
建物用途／大学
建 築 主／学校法人龍谷大学
施 工 者／松井建設株式会社大阪支店
竣工年月／2018 年 2 月

構 造／RC・SRC・S 造
階 数／地上 3 階
敷地面積／2,859.27㎡
建築面積／1,707.54㎡
延床面積／4,184.50㎡

〈審査講評〉一見すると保存・改修の計画かと見まごうほど落ち着いた外観であり、事実、初めて書類審査で写真を目にしたときは、即座に新築だとは認識できなかった。それほど周囲の歴史的景観と自然な調和をなしている。さらに、現地を訪れてみると、それは単に過去の様式を踏襲しただけのものではなく、現代の材料と技術を駆使しながら創意工夫を織り交ぜて伝統を更新した独創性をも備えていることに気付かされた。中でも、建築のファサードにあたるスチューデントコモンズエリアの鉄とガラスによる空間は、最も力点の置かれた場所であろう。その繊細な骨格は、奥に控えた講義室エリアの重厚なコンクリート躯体とあえて構造を一体することで実現されたもので、その透き通るような空間を介して、外部の環境と閉じた内部が緩やかにつながり合っている。歴史や時間に対する敬意と新しい時代への眼差しが品よく合わさった希望を感じさせる建築である。（審査委員 橋本一郎）

〈審査講評〉本作品は猪熊通の北端 100m ほどの範囲に広がるキャンパス内にある。西本願寺内にあって重要文化財に指定された明治時代の学校建築が複数残っている。この計画では猪熊通を挟んだ通り沿いにこのデザインを展開させて、道空間を意識した街並みとして展開させたことに大きな意義がある。ファサードはアルミの鋳物を多用し、古い擬洋風のデザインを繊細かつシンプルに解釈し直している。かつての寄宿舎棟のデザインを踏襲したことで、生活空間のもつスケールと窓の多いファサードが、通りに親しみやすさをもたらすことに成功している。加えて、オリジナルの壁面をガラスに置き換えることで、今の大学に要請される多様な交流による学びの場を、積極的にまちに「見せる」工夫もなされていることが評価された。（審査委員 松岡 聡）

審査風景



■渡辺節賞部門 渡辺節賞 HAT house 一生きていく住まいー

設計者 阿曾美実（阿曾美実建築設計事務所）



阿曾美実
1977年9生まれ
1996年3月 金沢工業大学工学部建築
学科卒業
2002年3月 金沢工業大学大学院建築
学専攻修了
2002-2006年 小山隆治建築研究所
（2005年 kaichida design+asoiにて活動）
2006年 阿曾美実建築設計事務所設立
2011-2013年 大阪人間科学大学 非常勤講師
〔主な建築作品と受賞歴〕
2006年 KOBE DRAFT!4 最終選考
2008年 JIA KINKI U-40設計コンペティション六甲山上の展望台
優秀賞
2015年 第10回 関西建築家新人賞

建築位置／神戸市灘区
建物用途／住宅兼事務所
建 築 主／個人邸
施 工 者／大垣林業株式会社
竣工年月／2017 年 9 月
構 造／W 造
階 数／地上 2 階
敷地面積／136.10㎡
建築面積／80.98㎡
延床面積／165.71㎡

撮影 小川重雄

〈審査講評〉斜面地に建つ小規模な個人住宅兼アトリエ。敷地に沿った長方形の外殻に対して 45 度傾けた軸線に沿って内部空間を構成。これにより様々な効果をもたらしている。玄関前にある三角形の屋外空間は、急坂を上ってきた来訪者が一息つける心地良い場所となり、建物内部では外からの光が斜めに反射することで奥行と立体感が生まれる。屋根の小屋組を斜め方向に設置することで大スパンとなり、リビングを実際より大きな空間として見せているなど。内部の構成は中庭を吹抜けとし、その周りにレベルの異なる床をスキップさせて配置。玄関からアトリエを見ながら土間を通り、奥まった所から階段を徐々に登りながらリビングへ、そして屋上テラスに至る経路の中で、仕上げの異なる床や壁が目に入り、ハッとさせられる場面が多く飽きることがない。その感じ方は住まい手によって様々に異なると思われるが「新しい発見を繰返しながら長くこの住宅で過ごす」という既成の住宅に無い新しい住まい方の提案を試みた意欲的な作品である。（審査委員 松田浩三）

〈審査講評〉坂を登ってくると、壁面を大きく面取りしたピロティが人を受け止め、そのまま通り土間に連続する印象である。建物の外形から 45 度振った、くの字の土間とインナーテラスが奥行きを生み、視線と動線が、吹抜け回りの回遊やブリッジ、室内窓によって複雑に折り込まれている。軸の平面操作に加えて、3 ヒンジトラスの屋根やスキップフロア、アーチといった一瞬過剰かと思う要素の組み合わせは、設計者の意図する、自由にスペース同士を関係づける重要な役割を担っているように感じる。例えば大きなアーチの奥には、明るい吹抜けと、そこに張り出した踊り場、直上のブリッジがすっぽりと収まり、1 階のアトリエの大きな背景となる。意外なスペースや要素の繋ぎの集合が家全体に行き渡り、設計者の言う路地のようなまとまりを巧妙に生みだしている。（審査委員 松岡 聡）

